



Embedded Event Manager の設定

この章では、Embedded Event Manager (EEM) を設定して Cisco NX-OS デバイス上のクリティカルイベントを検出し、対処する方法について説明します。

- [EEM について \(1 ページ\)](#)
- [EEM の前提条件 \(6 ページ\)](#)
- [EEM の注意事項と制約事項 \(6 ページ\)](#)
- [EEM のデフォルト設定 \(7 ページ\)](#)
- [EEM の設定 \(8 ページ\)](#)
- [EEM の設定確認 \(23 ページ\)](#)
- [EEM の設定例 \(24 ページ\)](#)
- [イベント ログの自動収集とバックアップ \(25 ページ\)](#)

EEM について

EEM はデバイス上で発生するイベントをモニタし、設定に基づいて各イベントの回復またはトラブルシューティングのためのアクションを実行します。

EEM は次の 3 種類の主要コンポーネントからなります。

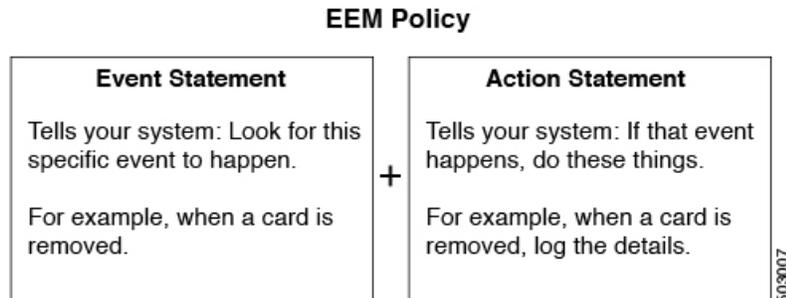
- イベント文：別の Cisco NX-OS コンポーネントからモニタし、アクション、回避策、または通知が必要になる可能性のあるイベント。
- アクション文：CLI コマンドの実行、Smart Call Home 機能を使用した電子メールの送信、インターフェイスの無効化など、イベントから回復するために EEM が実行できるアクション。
- ポリシー：イベントのトラブルシューティングまたはイベントからの回復を目的とした 1 つまたは複数のアクションとペアになったイベント。

ポリシー

EEM ポリシーは、イベント文および1つまたは複数のアクション文からなります。イベント文では、探すイベントとともに、イベントのフィルタリング特性を定義します。アクション文では、イベントの発生時に EEM が実行するアクションを定義します。

この図は、EEM ポリシーの基本的な2種類の文を示します。

図 1: EEM ポリシー文



コマンドラインインターフェイス (CLI) または VSH スクリプトを使用して EEM ポリシーを設定できます。

EEM からデバイス全体のポリシー管理ビューが得られます。スーパーバイザ上で EEM ポリシーを設定すると、EEM がイベントタイプに基づいて、正しいモジュールにポリシーをプッシュします。EEM はモジュール上でローカルに、またはスーパーバイザ上で (デフォルトのオプション)、発生したイベントに対応するアクションを実行します。

EEM はスーパーバイザ上でイベント ログを維持します。

Cisco NX-OS には、設定済みのさまざまなシステム ポリシーがあります。これらのシステムポリシーでは、デバイスに関連する多数の一般的なイベントおよびアクションが定義されています。システムポリシー名は、2個の下線記号 (__) から始まります。

使用するネットワークに合わせてユーザポリシーを作成できます。ユーザポリシーを作成すると、そのポリシーと同じイベントに関連するシステムポリシーアクションが EEM によって発生したあと、ユーザポリシーで指定したアクションが行われます。

一部のシステムポリシーは上書きすることもできます。設定した上書き変更がシステムポリシーの代わりになります。イベントまたはアクションの上書きが可能です。

設定済みのシステムポリシーを表示して、上書き可能なポリシーを判断するには、**show event manager system-policy** コマンドを使用します。



(注) **show running-config eem** コマンドを使用して、各ポリシーのコンフィギュレーションを確認してください。イベント文が指定されていて、アクション文が指定されていない上書きポリシーを設定した場合、アクションは開始されません。また、障害も通知されません。



- (注) 上書きポリシーには、必ずイベント文を指定します。上書きポリシーにイベント文が含まれていないと、システムポリシーで可能性のあるイベントがすべて上書きされます。

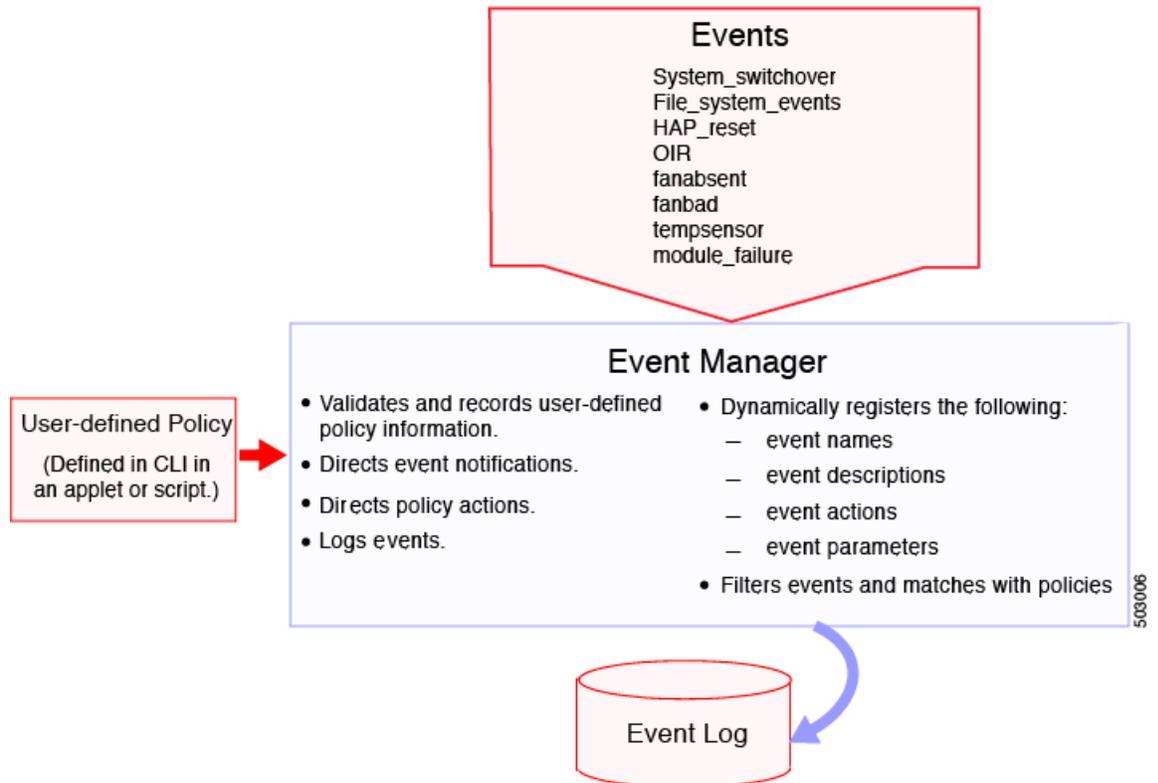
イベント文

イベントは、回避、通知など、何らかのアクションが必要なデバイスアクティビティです。これらのイベントは通常、インターフェイスやファンの誤動作といったデバイスの障害に関連します。

EEM ではイベントフィルタを定義して、クリティカルイベントまたは指定された時間内で繰り返し発生したイベントだけが関連付けられたアクションのトリガーになるようにします。

この図は、EEM によって処理されたイベントを示します。

図 2: EEM の概要



イベント文では、ポリシー実行のトリガーになるイベントを指定します。複数イベントトリガーを設定できます。

EEM はイベント文に基づいてポリシーをスケジューリングし、実行します。EEM はイベントおよびアクション コマンドを検証し、定義に従ってコマンドを実行します。



(注) 発生したイベントでデフォルトのアクションを処理できるようにする場合は、`event-default` アクション文を許可して EEM ポリシーを設定する必要があります。

アクション文

アクション文では、ポリシーによって実行されるアクションを記述します。各ポリシーに複数のアクション文を設定できます。ポリシーにアクションを関連付けなかった場合、EEM はイベント観察を続けますが、アクションは実行されません。

EEM がアクション文でサポートするアクションは、次のとおりです。

- CLI コマンドの実行。
- カウンタのアップデート。
- 例外の記録。
- モジュールの強制的シャットダウン
- デバイスをリロードします。
- 電力のバジェット超過による特定モジュールのシャットダウン。
- Syslog メッセージの生成。
- Call Home イベントの生成。
- SNMP 通知の生成。
- システム ポリシー用デフォルトアクションの使用。



(注) EEM は、合計 1024 文字までの、完全なアクション CLI リストのみを処理できます。さらにアクションが必要な場合は、同じトリガーを持つ新しい冗長アプレットとして定義する必要があります。



(注) 発生したイベントでデフォルトのアクションを処理できるようにする場合は、デフォルトのアクションを許可する EEM ポリシーを設定する必要があります。たとえば、`match` 文で CLI コマンドを照合する場合、EEM ポリシーに `event-default` アクション文を追加する必要があります。この文がないと、EEM では CLI コマンドを実行できません。



- (注) ユーザ ポリシーまたは上書きポリシーの中に、相互に否定したり、関連付けられたシステムポリシーに悪影響を与えたりするようなアクション文がないかどうかを確認してください。

VSH スクリプト ポリシー

テキストエディタを使用し、VSH スクリプトでポリシーを作成することもできます。このようなポリシーにも、他のポリシーと同様、イベント文およびアクション文（複数可）を使用します。また、これらのポリシーでシステムポリシーを補うことも上書きすることもできます。VSH スクリプト ポリシーの作成後、そのポリシーをデバイスにコピーしてアクティブにします。

環境変数

すべてのポリシーに使用できる、EEM の環境変数を定義できます。環境変数は、複数のポリシーで使用できる共通の値を設定する場合に便利です。たとえば、外部電子メール サーバの IP アドレスに対応する環境変数を作成できます。

パラメータ置換フォーマットを使用することによって、アクション文で環境変数を使用できます。

この例では、「EEM action」というリセット理由を指定し、モジュール 1 を強制的にシャットダウンするアクション文の例を示します。

```
switch (config-eem-policy)# action 1.0 forceshut module 1 reset-reason "EEM action."
```

シャットダウンの理由に `default-reason` という環境変数を定義すると、次の例のように、リセット理由を環境変数に置き換えることができます。

```
switch (config-eem-policy)# action 1.0 foreshut module 1 reset-reason $default-reason
```

この環境変数は、任意のポリシーで再利用できます。

EEM イベント関連

イベントの組み合わせに基づいて EEM ポリシーをトリガーできます。まず、**tag** キーワードを使用して EEM ポリシーに複数のイベントを作成し区別します。次に、一連のブール演算子（**AND**、**OR**、**ANDNOT**）を使用して、回数および時間をもとに、カスタム処理をトリガーするこれらのイベントの組み合わせを定義できます。

高可用性

Cisco NX-OS は、EEM のステートレス リスタートをサポートします。リブートまたはスーパーバイザ スイッチオーバーの後、Cisco NX-OS は実行コンフィギュレーションを適用します。

仮想化のサポート

アクションまたはイベントがすべて表示されるわけではありません。ポリシーを設定するには、`network-admin` の権限が必要です。

EEM の前提条件

EEM の前提条件は、次のとおりです。

- EEM を設定するには、`network-admin` のユーザ権限が必要です。

EEM の注意事項と制約事項

EEM 設定時の注意事項と制約事項は次のとおりです。

- 設定可能な EEM ポリシーの最大数は 500 です。
- ユーザポリシーまたは上書きポリシー内のアクション文が、相互に否定したり、関連付けられたシステムポリシーに悪影響を与えたりするようなことがないようにする必要があります。
- 発生したイベントでデフォルトのアクションを処理できるようにするには、デフォルトのアクションを許可する EEM ポリシーを設定する必要があります。たとえば、`match` 文で CLI コマンドを照合する場合、EEM ポリシーに `event-default` アクション文を追加する必要があります。この文がないと、EEM では CLI コマンドを実行できません。
- イベント ログの自動収集とバックアップには、次の注意事項があります。
 - デフォルトでは、スイッチのログ収集を有効にすると、サイズ、規模、コンポーネントのアクティビティに応じて、15分から数時間のイベントログが利用できるようになります。
 - 長期間にわたる関連ログを収集できるようにするには、必要な特定のサービス/機能に対してのみイベントログの保持を有効にします。「単一サービスの拡張ログファイル保持の有効化」を参照してください。内部イベントログをエクスポートすることもできます。「外部ログ ファイルストレージ」を参照してください。
 - トラブルシューティングを行うときは、内部イベントログのスナップショットを手動によりリアルタイムで収集することをお勧めします。「最近のログファイルのローカルコピーの生成」を参照してください。
- `show tech` コマンドを収集するように EEM ポリシーアクションを設定する場合は、同じアクションが再度呼び出される前に、`show tech` コマンドが完了するのに十分な時間を割り当ててください。
- オーバーライドポリシーについては、次の点に注意してください。

- イベント文が指定されていても、アクション文が指定されていない上書きポリシーを設定した場合、アクションは開始されません。また、障害も通知されません。
- 上書きポリシーにイベント文が含まれていないと、システムポリシーで可能性のあるイベントがすべて上書きされます。
- 正規コマンド式には、次のルールが適用されます。
 - すべての正規表現は、Portable Operating System Interface for uniX (POSIX) 拡張標準に準拠している必要があります。
 - すべてのキーワードを展開する必要があります。
 - 引数の置換には * 記号のみを使用できます。
- EEM イベント関連については、次の点に注意してください。
 - EEM イベント関連はスーパーバイザ モジュールだけでサポートされます。
 - EEM イベント関連は、単一ポリシー内の別のモジュール間ではサポートされません。
 - EEM イベント関連は 1 つのポリシーに最大 4 つのイベント文をサポートします。イベントタイプは同じでも別でもかまいませんが、サポートされるイベントタイプは、cli、カウンタ、モジュール、モジュール障害、oir、snmp、syslog だけです。
 - EEM イベント関連はシステムのデフォルト ポリシーを上書きしません。
- 複数のイベント文が EEM ポリシーに存在する場合は、各イベント文に **tag** キーワードと一意な tag 引数が必要です。
- デフォルトアクション実行は、タグ付きのイベントで設定されているポリシーではサポートされません。
- Python から EEM を呼び出すことができます。Python の詳細については、『[Cisco Nexus 9000 シリーズ NX-OS プログラマビリティ ガイド](#)』を参照してください。

EEM のデフォルト設定

この表では、EEM のデフォルト設定を一覧にしています。

パラメータ	デフォルト
システム ポリシー	アクティブ

EEM の設定

システムポリシーに基づいて実行されるアクションを含むポリシーを作成できます。システムポリシーに関する情報を表示するには、**show event manager system-policy** コマンドを使用します。

環境変数の定義

EEM ポリシーでパラメータとして機能する変数を定義できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します
ステップ 2	event manager environment <i>variable-name</i> <i>variable-value</i> 例： <pre>switch(config)# event manager environment emailto "admin@anyplace.com"</pre>	EEM 用の環境変数を作成します。 <i>variable-name</i> は大文字と小文字を区別し、最大 29 文字の英数字を使用できます。 <i>variable-value</i> には最大 39 文字の英数字を引用符で囲んで使用できます。
ステップ 3	(任意) show event manager environment { <i>variable-name</i> all } 例： <pre>switch(config)# show event manager environment all</pre>	設定した環境変数に関する情報を表示します。
ステップ 4	(任意) copy running-config startup-config 例： <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	実行設定を、スタートアップ設定にコピーします。

CLI によるユーザ ポリシーの定義

CLI を使用して、デバイスにユーザ ポリシーを定義できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	event manager applet <i>applet-name</i> 例： switch(config)# event manager applet monitorShutdown switch(config-applet)#	EEM にアプレットを登録し、アプレット コンフィギュレーション モードを開始します。 <i>applet-name</i> は大文字と小文字を区別し、最大 29 文字の英数字を使用できます。
ステップ 3	(任意) description <i>policy-description</i> 例： switch(config-applet)# description "Monitors interface shutdown."	ポリシーの説明になるストリングを設定します。 <i>string</i> には最大 80 文字の英数字を使用できます。ストリングは引用符で囲みます。
ステップ 4	event <i>event-statement</i> 例： switch(config-applet)# event cli match "conf t ; interface * ; shutdown"	ポリシーのイベント文を設定します。イベント文が複数ある場合、このステップを繰り返します。「 イベント文の設定 (10 ページ) 」を参照してください。
ステップ 5	(任意) tag <i>tag</i> {and andnot or} <i>tag</i> [and andnot or {<i>tag</i>}] {happens occurs in seconds} 例： switch(config-applet)# tag one or two happens 1 in 10000	ポリシー内の複数のイベントを相互に関連付けます。 <i>occurs</i> 引数の範囲は 1 ~ 4294967295 です。 <i>seconds</i> 引数の範囲は 0 ~ 4294967295 秒です。
ステップ 6	action <i>number</i>[<i>number2</i>] <i>action-statement</i> 例： switch(config-applet)# action 1.0 cli show interface e 3/1	ポリシーのアクション文を設定します。アクション文が複数ある場合、このステップを繰り返します。「 アクション文の設定 (16 ページ) 」を参照してください。
ステップ 7	(任意) show event manager policy-state <i>name</i> [<i>module module-id</i>] 例： switch(config-applet)# show event manager policy-state monitorShutdown	設定したポリシーの状態に関する情報を表示します。
ステップ 8	(任意) copy running-config startup-config 例：	実行設定を、スタートアップ設定にコピーします。

コマンドまたはアクション	目的
switch(config)# copy running-config startup-config	

イベント文の設定

イベント文を設定するには、アプレット コンフィギュレーション モードで次のいずれかのコマンドを使用します。

コマンド	目的
<p>event application [tag tag] sub-system sub-system-id type event-type</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event application sub-system 798 type 1</pre>	<p>イベントの指定がサブシステム ID およびアプリケーション イベントタイプに一致する場合に、イベントを発生させます。</p> <p><i>sub-system-id</i> と <i>event-type</i> の範囲は 1 ~ 4294967295 です。</p> <p>tag tag キーワードと引数のペアは、複数のイベントがポリシーに含まれている場合、この特定のイベントを識別します。</p> <p>(注) このコマンドを使用するには、まず feature evmed コマンドを有効にして一般的なイベントディテクタを有効にする必要があります。</p>
<p>event cli [tag tag] match expression [count repeats time seconds]</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event cli match "conf t ; interface * ; shutdown"</pre>	<p>正規表現と一致するコマンドが入力された場合に、イベントを発生させます。</p> <p>tag tag キーワードと引数のペアは、複数のイベントがポリシーに含まれている場合、この特定のイベントを識別します。</p> <p><i>repeats</i> の範囲は 1 ~ 65000 です。<i>time</i> の範囲は 0 ~ 4294967295 秒です。0 は無制限を示します。</p>

コマンド	目的
<p>event counter [tag tag] name counter entry-val entry entry-op {eq ge gt le lt ne} [exit-val exit exit-op {eq ge gt le lt ne}]</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event counter name mycounter entry-val 20 gt</pre>	<p>カウンタが、開始演算子に基づいて開始のしきい値を超えた場合にイベントを発生させます。イベントはただちにリセットされます。任意で、カウンタが終了のしきい値を超えたあとでリセットされるように、イベントを設定できます。</p> <p>tag tag キーワードと引数のペアは、複数のイベントがポリシーに含まれている場合、この特定のイベントを識別します。</p> <p>counter name は大文字と小文字を区別し、最大 28 の英数字を使用できます。entry および exit の値の範囲は 0 ~ 2147483647 です。</p>
<p>event fanabsent [fan number] time seconds</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event fanabsent time 300</pre>	<p>秒数で設定された時間を超えて、ファンがデバイスから取り外されている場合に、イベントを発生させます。number の範囲はモジュールに依存します。seconds の範囲は 10 ~ 64000 です。</p>
<p>event fanbad [fan number] time seconds</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event fanbad time 3000</pre>	<p>秒数で設定された時間を超えて、ファンが故障状態の場合に、イベントを発生させます。number の範囲はモジュールに依存します。seconds の範囲は 10 ~ 64000 です。</p>
<p>event fib {adjacency extra resource tcam usage route {extra inconsistent missing}}</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event fib adjacency extra</pre>	<p>次のいずれかに対するイベントを発生させます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • adjacency extra : ユニキャスト FIB に追加のルートがある場合。 • resource tcam usage : TCAM 使用率がいずれかの方向で 5 の倍数になるごとに。 • route {extra inconsistent missing} : ユニキャスト FIB でルートが追加、変更、または削除される場合。
<p>event gold module {slot all} test test-name [severity {major minor moderate}] testing-type {bootup monitoring ondemand scheduled} consecutive-failure count</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event gold module 2 test ASICRegisterCheck testing-type ondemand consecutive-failure 2</pre>	<p>名前指定されたオンライン診断テストが、設定された回数だけ連続して、設定された重大度で失敗した場合に、イベントを発生させます。slot の範囲は 1 ~ 10 です。test-name は設定されたオンライン診断テストの名前です。count の範囲は 1 ~ 1000 です。</p>

コマンド	目的
<p>event interface [<i>tag tag</i>] {<i>name interface slot/port parameter</i>}</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event interface ethernet 2/2 parameter</pre>	<p>カウンタが指定のインターフェイスに対して超えた場合に、イベントを発生させます。</p> <p>tag tag キーワードと引数のペアは、複数のイベントがポリシーに含まれている場合、この特定のイベントを識別します。</p> <p>(注) このコマンドを使用するには、まず feature evmed コマンドを有効にして一般的なイベントディテクタを有効にする必要があります。</p>
<p>event memory {<i>critical minor severe</i>}</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event memory critical</pre>	<p>メモリのしきい値を超えた場合にイベントを発生させます。メモリのしきい値の設定 (20 ページ) も参照してください。</p>
<p>event module [<i>tag tag</i>] status {<i>online offline any</i>} module {<i>all module-num</i>}</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event module status offline module all</pre>	<p>指定したモジュールが選択された状態になったときにイベントを発生させます。</p> <p>tag tag キーワードと引数のペアは、複数のイベントがポリシーに含まれている場合、この特定のイベントを識別します。</p>
<p>event module-failure [<i>tag tag</i>] type <i>failure-type module</i> {<i>slot all</i>} count <i>repeats</i> [<i>time seconds</i>]</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event module-failure type lc-failed module 3 count 1</pre>	<p>モジュールが設定された障害タイプになった場合に、イベントを発生させます。</p> <p>tag tag キーワードと引数のペアは、複数のイベントがポリシーに含まれている場合、この特定のイベントを識別します。</p> <p><i>repeats</i> 範囲は 0 ~ 4294967295 です。<i>seconds</i> の範囲は 0 ~ 4294967295 秒です。0 は無制限を示します。</p>
<p>event none</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event none</pre>	<p>手動で指定されたイベントがないポリシー イベントを実行します。</p> <p>(注) このコマンドを使用するには、まず feature evmed コマンドを有効にして一般的なイベントディテクタを有効にする必要があります。</p>

コマンド	目的
<p>event oir [tag tag] {fan module powersupply} {anyoir insert remove} [<i>number</i>]</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event oir fan remove 4</pre>	<p>設定されたデバイス構成要素（ファン、モジュール、または電源モジュール）がデバイスに取り付けられた場合、またはデバイスから取り外された場合に、イベントを発生させます。</p> <p>tag tag キーワードと引数のペアは、複数のイベントがポリシーに含まれている場合、この特定のイベントを識別します。</p> <p>任意で、ファン、モジュール、または電源モジュールの具体的な番号を設定できます。 <i>number</i> の範囲は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ファン番号：モジュール依存 • モジュール番号：デバイス依存 • 電源モジュール番号：範囲は 1～3
<p>event policy-default count <i>repeats</i> [time seconds]</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event policy-default count 3</pre>	<p>システム ポリシーで設定されているイベントを使用します。このオプションは、ポリシーを上書きする場合に使用します。</p> <p><i>repeats</i> の範囲は 1～65000 です。<i>seconds</i> の範囲は 0～4294967295 秒です。0 は無制限を示します。</p>
<p>event poweroverbudget</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event poweroverbudget</pre>	<p>電力バジェットが設定された電源モジュールの容量を超えた場合に、イベントを発生させます。</p>

コマンド	目的
<p>event snmp [<i>tag tag</i>] oid <i>oid</i> get-type {<i>exact</i> <i>next</i>} entry-op {<i>eq</i> <i>ge</i> <i>gt</i> <i>le</i> <i>lt</i> <i>ne</i>} entry-val <i>entry</i> [exit-comb {<i>and</i> <i>or</i>}] exit-op {<i>eq</i> <i>ge</i> <i>gt</i> <i>le</i> <i>lt</i> <i>ne</i>} exit-val <i>exit</i> exit-time <i>time</i> polling-interval <i>interval</i></p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event snmp oid 1.3.6.1.2.1.31.1.1.1.6 get-type next entry-op lt 300 entry-val 0 exit-op eq 400 exit-time 30 polling-interval 300</pre>	<p>SNMP OID が、開始演算子に基づいて開始のしきい値を超えた場合にイベントを発生させます。イベントはただちにリセットされます。または任意で、カウンタが終了のしきい値を超えたあとでリセットされるように、イベントを設定できます。OID はドット付き10進表記です。</p> <p>tag tag キーワードと引数のペアは、複数のイベントがポリシーに含まれている場合、この特定のイベントを識別します。</p> <p><i>entry</i> および <i>exit</i> の値の範囲は 0 ~ 18446744073709551615 です。 <i>time</i> の範囲は 0 ~ 2147483647 秒です。 <i>interval</i> の範囲は 1 ~ 2147483647 秒です。</p>
<p>event storm-control</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event storm-control</pre>	<p>ポート上のトラフィックが設定されたストーム制御しきい値を超えた場合に、イベントを発生させます。</p>
<p>event syslog [occurs <i>count</i>] [pattern <i>string</i> period <i>time</i> priority <i>level</i> tag <i>tag</i>]</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event syslog period 500</pre>	<p>指定した syslog のしきい値を超えた場合にイベントを発生させます。カウントの範囲は 1 ~ 65000 で、時間の範囲は 1 ~ 4294967295 です。プライオリティの範囲は 0 ~ 7 です。</p> <p>tag tag キーワードと引数のペアは、複数のイベントがポリシーに含まれている場合、この特定のイベントを識別します。</p>
<p>event sysmgr memory [module <i>module-num</i>] major <i>major-percent</i> minor <i>minor-percent</i> clear <i>clear-percent</i></p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event sysmgr memory minor 80</pre>	<p>指定したシステム マネージャのメモリのしきい値を超えた場合にイベントを発生させます。パーセンテージの範囲は 1 ~ 99 です。</p>
<p>event sysmgr switchover count <i>count</i> time <i>interval</i></p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event sysmgr switchover count 10 time 1000</pre>	<p>指定した switchover count が、指定した time interval を超えた場合にイベントを発生させます。 switchover count の範囲は 1 ~ 65000 です。 time interval の範囲は 0 ~ 2147483647 です。</p>

コマンド	目的
<p>event temperature [module slot] [<i>sensor-number</i>] threshold {any major minor}</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event temperature module 2 threshold any</pre>	<p>温度センサーが設定されたしきい値を超えた場合に、イベントを発生させます。sensor の範囲は 1 ~ 18 です。</p>
<p>event timer {absolute time <i>time name name</i> countdown time <i>time name name</i> cron cronentry <i>string</i> tag tag watchdog time <i>time name name</i>}</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event timer absolute time 100 name abtimer</pre>	<p>指定した時間に到達した場合に、イベントを発生させます。時間の範囲は 1 ~ 4294967295 です。</p> <ul style="list-style-type: none"> • absolute time : 指定された絶対時刻が発生した場合に、イベントを発生させます。 • countdown time : 指定された時間がゼロにカウントダウンされたときに、イベントを発生させます。タイマーはリセットされません。 • cron cronentry : CRON 文字列の指定が現在時刻に一致する場合に、イベントを発生させます。 • watchdog time : 指定された時間がゼロにカウントダウンされたときに、イベントを発生させます。タイマーは、初期値に自動的にリセットされ、カウントダウンが続行されます。 <p>tag tag キーワードと引数のペアは、複数のイベントがポリシーに含まれている場合、この特定のイベントを識別します。</p> <p>(注) このコマンドを使用するには、まず feature evmed コマンドを有効にして一般的なイベントディテクタを有効にする必要があります。</p>
<p>event track [tag tag] <i>object-number</i> state {any down up}</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# event track 1 state down</pre>	<p>トラッキング対象オブジェクトが設定された状態になった場合に、イベントを発生させます。</p> <p>tag tag キーワードと引数のペアは、複数のイベントがポリシーに含まれている場合、この特定のイベントを識別します。</p> <p>指定できる <i>object-number</i> の範囲は 1 ~ 500 です。</p>

アクション文の設定

アクション文を設定するには、EEM コンフィギュレーション モードで次のいずれかのコマンドを使用します。

コマンド	目的
<p>action <i>number</i>[.<i>number2</i>] cli <i>command1</i> [<i>command2</i>...] [local]</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# action 1.0 cli "show interface e 3/1"</pre>	<p>設定された CLI コマンドを実行します。任意で、イベントが発生したモジュール上でコマンドを実行できます。アクションラベルのフォーマットは <i>number1.number2</i> です。</p> <p><i>number</i> は 16 桁までの任意の数値にできます。<i>number2</i> の範囲は 0 ~ 9 です。</p>
<p>action <i>number</i>[.<i>number2</i>] counter name <i>counter value val op</i> {dec inc nop set}</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# action 2.0 counter name mycounter value 20 op inc</pre>	<p>設定された値および操作でカウンタを変更します。アクションラベルのフォーマットは <i>number1.number2</i> です。</p> <p><i>number</i> は 16 桁までの任意の数値にできます。<i>number2</i> の範囲は 0 ~ 9 です。</p> <p>counter name は大文字と小文字を区別し、最大 28 の英数字を使用できます。<i>val</i> には 0 ~ 2147483647 の整数または置換パラメータを指定できます。</p>
<p>action <i>number</i>[.<i>number2</i>] event-default</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# action 1.0 event-default</pre>	<p>関連付けられたイベントのデフォルトアクションを実行します。アクションラベルのフォーマットは <i>number1.number2</i> です。</p> <p><i>number</i> は 16 桁までの任意の数値にできます。<i>number2</i> の範囲は 0 ~ 9 です。</p>
<p>action <i>number</i>[.<i>number2</i>] forceshut [module slot xbar xbar-number] reset-reason seconds</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# action 1.0 forceshut module 2 reset-reason "flapping links"</pre>	<p>モジュール、クロスバー、またはシステム全体を強制的にシャットダウンします。アクションラベルのフォーマットは <i>number1.number2</i> です。</p> <p><i>number</i> は 16 桁までの任意の数値にできます。<i>number2</i> の範囲は 0 ~ 9 です。</p> <p>リセット理由は、引用符で囲んだ最大 80 文字の英数字ストリングです。</p>
<p>action <i>number</i>[.<i>number2</i>] overbudgetshut [module slot[-<i>slot</i>]]</p> <p>例:</p> <pre>switch(config-applet)# action 1.0 overbudgetshut module 3-5</pre>	<p>電力バジェット超過の問題により、1 つまたは複数のモジュールまたはシステム全体を強制的にシャットダウンします。</p> <p><i>number</i> は 16 桁までの任意の数値にできます。<i>number2</i> の範囲は 0 ~ 9 です。</p>

コマンド	目的
action number[.number2] policy-default 例: <pre>switch(config-applet)# action 1.0 policy-default</pre>	上書きしているポリシーのデフォルトアクションを実行します。アクションラベルのフォーマットは <code>number1.number2</code> です。 <i>number</i> は 16 桁までの任意の数値にできます。 <i>number2</i> の範囲は 0 ~ 9 です。
action number[.number2] publish-event 例: <pre>switch(config-applet)# action 1.0 publish-event</pre>	アプリケーション固有のイベントの発行を強制します。アクションラベルのフォーマットは <code>number1.number2</code> です。 <i>number</i> は 16 桁までの任意の数値にできます。 <i>number2</i> の範囲は 0 ~ 9 です。
action number[.number2] reload [module slot[-slot]] 例: <pre>switch(config-applet)# action 1.0 reload module 3-5</pre>	1つまたは複数のモジュールまたはシステム全体を強制的にリロードします。 <i>number</i> は 16 桁までの任意の数値にできます。 <i>number2</i> の範囲は 0 ~ 9 です。
action number[.number2] snmp-trap {[intdata1 data [intdata2 data]] [strdata string]} 例: <pre>switch(config-applet)# action 1.0 snmp-trap strdata "temperature problem"</pre>	設定されたデータとともにSNMPトラップを送信します。 <i>number</i> には、最大16桁の任意の数値を指定できます。 <i>number2</i> の範囲は 0 ~ 9 です。 <i>data</i> 引数には、最大 80 桁の任意の数を指定できます。 <i>string</i> には最大 80 文字の英数字を使用できます。
action number[.number2] syslog [priority prio-val] msg error-message 例: <pre>switch(config-applet)# action 1.0 syslog priority notifications msg "cpu high"</pre>	設定されている優先度で、カスタマイズされた Syslog メッセージが送信されます。数値は 16 桁までの任意の数値にできます。 <i>number2</i> の範囲は 0 ~ 9 です。 <i>error-message</i> には最大 80 文字の英数字を引用符で囲んで使用できます。



- (注) 発生したイベントでデフォルトのアクションを処理できるようにする場合は、デフォルトのアクションを許可する EEM ポリシーを設定する必要があります。たとえば、`match` 文で CLI コマンドを照合する場合、EEM ポリシーに `event-default` アクション文を追加する必要があります。この文がないと、EEM では CLI コマンドを実行できません。 **terminal event-manager bypass manager bypass** コマンドを使用して、CLI でのすべての EEM ポリシーを、CLI コマンドの実行と一致させることができます。

VSH スクリプトによるポリシーの定義

VSH スクリプトを使用してポリシーを定義できます。

始める前に

管理者の権限でログインしていることを確認します。

スクリプト名がスクリプト ファイル名と同じ名前であることを確認します。

手順

ステップ 1 テキスト エディタで、ポリシーを定義するコマンドリストを指定します。

ステップ 2 テキスト ファイルに名前をつけて保存します。

ステップ 3 次のシステム ディレクトリにファイルをコピーします。 `bootflash://eem/user_script_policies`

VSH スクリプト ポリシーの登録およびアクティブ化

VSH スクリプトで定義したポリシーを登録してアクティブにできます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します
ステップ 2	event manager policy <i>policy-script</i> 例： <pre>switch(config)# event manager policy moduleScript</pre>	EEM スクリプト ポリシーを登録してアクティブにします。 <i>policy-script</i> は大文字と小文字を区別し、最大 29 の英数字を使用できます。
ステップ 3	(任意) copy running-config startup-config 例： <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	実行設定を、スタートアップ設定にコピーします。

ポリシーの上書き

システム ポリシーは上書き可能です。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例： switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します
ステップ 2	(任意) show event manager policy-state system-policy 例： switch(config-applet)# show event manager policy-state __ethpm_link_flap Policy __ethpm_link_flap Cfg count : 5 Cfg time interval : 10.000000 (seconds) Hash default, Count 0	上書きするシステム ポリシーの情報をしきい値を含めて表示します。システム ポリシー名を突き止めるには、 show event manager system-policy コマンドを使用します。システム ポリシーについては、 Embedded Event Manager システム イベントおよび設定例 を参照してください。
ステップ 3	event manager applet applet-name override system-policy 例： switch(config)# event manager applet ethport override __ethpm_link_flap switch(config-applet)#	システムポリシーを上書きし、アプレット コンフィギュレーション モードを開始します。 <i>applet-name</i> は大文字と小文字を区別し、最大 29 文字の英数字を使用できます。 <i>system-policy</i> は、システムポリシーの1つにする必要があります。
ステップ 4	(任意) description policy-description 例： description "Overrides link flap policy."	ポリシーの説明になるストリングを設定します。 <i>string</i> には最大 80 文字の英数字を使用できます。ストリングは引用符で囲みます。
ステップ 5	必須: event event-statement 例： switch(config-applet)# event policy-default count 2 time 1000	ポリシーのイベント文を設定します。
ステップ 6	必須: action number action-statement 例： switch(config-applet)# action 1.0 syslog priority warnings msg "Link is flapping."	ポリシーのアクション文を設定します。アクション文が複数ある場合、このステップを繰り返します。
ステップ 7	(任意) show event manager policy-state name 例： switch(config-applet)# show event manager policy-state ethport	設定したポリシーに関する情報を表示します。

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 8	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	実行設定を、スタートアップ設定にコピーします。

メモリのしきい値の設定

イベントを発生させるメモリしきい値を設定し、オペレーティングシステムがメモリを割り当てられない場合にプロセスを終了させるかどうかを設定できます。

始める前に

管理者の権限でログインしていることを確認します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します
ステップ 2	system memory-thresholds minor minor severe severe critical critical 例 : <pre>switch(config)# system memory-thresholds minor 60 severe 70 critical 80</pre>	EEM メモリ イベントを生成するシステムメモリしきい値を設定します。デフォルト値は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> • マイナー - 85 • 深刻 - 90 • 重大 - 95 これらのメモリのしきい値を超えた場合、システムは次の syslog を生成します。 <ul style="list-style-type: none"> • 2013 May 7 17:06:30 switch %\$%PLATFORM-2-MEMORY_ALERT: Memory Status Alert : MINOR • 2013 May 7 17:06:30 switch %\$%PLATFORM-2-MEMORY_ALERT: Memory Status Alert : SEVERE

	コマンドまたはアクション	目的
		<ul style="list-style-type: none"> • 2013 May 7 17:06:30 switch %\$ %PLATFORM-2-MEMORY_ALERT: Memory Status Alert : CRITICAL • 2013 May 7 17:06:35 switch %\$ %PLATFORM-2-MEMORY_ALERT: Memory Status Alert : MINOR ALERT RECOVERED • 2013 May 7 17:06:35 switch %\$ %PLATFORM-2-MEMORY_ALERT: Memory Status Alert : SEVERE ALERT RECOVERED • 2013 May 7 17:06:35 switch %\$ %PLATFORM-2-MEMORY_ALERT: Memory Status Alert : CRITICAL ALERT RECOVERED
ステップ 3	(任意) system memory-thresholds threshold critical no-process-kill 例 : <pre>switch(config)# system memory-thresholds threshold critical no-process-kill</pre>	メモリを割り当てられない場合もプロセスを終了しないようにシステムを設定します。デフォルト値では、最もメモリを消費するプロセスから終了できます。
ステップ 4	(任意) show running-config include "system memory" 例 : <pre>switch(config-applet)# show running-config include "system memory"</pre>	システムメモリ設定に関する情報を表示します。
ステップ 5	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	実行設定を、スタートアップ設定にコピーします。

EEM パブリッシャとしての syslog の設定

スイッチからの syslog メッセージをモニタできます。



(注) syslog メッセージをモニタする検索文字列の最大数は 10 です。

始める前に

EEM は、Syslog による登録に使用可能である必要があります。

Syslog デーモンが設定され、実行される必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 2	event manager applet <i>applet-name</i> 例 : <pre>switch(config)# event manager applet abc switch(config-applet)#</pre>	EEM にアプレットを登録し、アプレット コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	event syslog [<i>tag tag</i>] {<i>occurs number</i> <i>period seconds</i> <i>pattern msg-text</i> <i>priority priority</i>} 例 : <pre>switch(config-applet)# event syslog occurs 10</pre>	syslog メッセージを監視し、ポリシーの検索文字列に基づいてポリシーを呼び出します。 <ul style="list-style-type: none"> • tag <i>tag</i> キーワードと引数のペアは、複数のイベントがポリシーに含まれている場合、この特定のイベントを識別します。 • occurs <i>number</i> のキーワードと引数のペアは、発生回数を指定します。指定できる範囲は 1 ~ 65000 です。 • period <i>seconds</i> のキーワードと引数のペアは、発生回数を指定します。値の範囲は 1 ~ 4294967295 です。 • pattern <i>msg-text</i> のキーワードと引数のペアは、マッチさせる正規表現を指定します。パターンには、文字テキスト、環境変数、またはこの2つの組み合わせを含めることができます。文字列に空白が含まれる場合は引用符で囲みます。 • priority <i>priority</i> のキーワードと引数のペアは、syslog メッセージのプライオリティを指定します。このキーワードを指定しないと、すべての

	コマンドまたはアクション	目的
		Syslog メッセージのプライオリティレベルが「情報レベル」に設定されます。
ステップ 4	(任意) copy running-config startup-config 例 : <pre>switch(config)# copy running-config startup-config</pre>	実行設定を、スタートアップ設定にコピーします。

EEM の設定確認

EEM 設定情報を表示するには、次のいずれかの作業を実行します。

コマンド	目的
show event manager environment [<i>variable-name</i> all]	イベント マネージャの環境変数に関する情報を表示します。
show event manager event-types [<i>event</i> all <i>module slot</i>]	イベント マネージャのイベントタイプに関する情報を表示します。
show event manager history events [detail] [maximum num-events] [severity {catastrophic minor moderate severe}]	すべてのポリシーについて、イベント履歴を表示します。
show event manager policy-state <i>policy-name</i>	しきい値を含め、ポリシーの状態に関する情報を表示します。
show event manager script system [<i>policy-name</i> all]	スクリプト ポリシーに関する情報を表示します。
show event manager system-policy [all]	定義済みシステム ポリシーに関する情報を表示します。
show running-config eem	EEM の実行コンフィギュレーションに関する情報を表示します。
show startup-config eem	EEM のスタートアップコンフィギュレーションに関する情報を表示します。

EEM の設定例

モジュール 3 の中断のないアップグレードエラーのしきい値だけを変更することによって、`__lcm_module_failure` システムポリシーを上書きする方法の例を示します。この例では、syslog メッセージも送信されます。その他のすべての場合、システムポリシー `__lcm_module_failure` の設定値が適用されます。

```
event manager applet example2 override __lcm_module_failure
event module-failure type hitless-upgrade-failure module 3 count 2
action 1 syslog priority errors msg module 3 "upgrade is not a hitless upgrade!"
action 2 policy-default
```

`__ethpm_link_flap` システムポリシーを上書きし、インターフェイスをシャットダウンする方法の例を示します。

```
event manager applet ethport override __ethpm_link_flap
event policy-default count 2 time 1000
action 1 cli conf t
action 2 cli int et1/1
action 3 cli no shut
```

CLI コマンドの実行を許可し、ユーザがデバイスでコンフィギュレーションモードを開始すると SNMP 通知を送る EEM ポリシーを作成する例を示します。

```
event manager applet TEST
event cli match "conf t"
action 1.0 snmp-trap strdata "Configuration change"
action 2.0 event-default
```



- (注) EEM ポリシーに **event-default** アクション文を追加する必要があります。この文がないと、EEM では CLI コマンドを実行できません。

次に、EEM ポリシーの複数イベントを関連付け、イベント トリガーの組み合わせに基づいてポリシーを実行する例を示します。この例では、EEM ポリシーは、指定された syslog パターンのいずれかが 120 秒以内に発生したときにトリガーされます。

```
event manager applet eem-correlate
event syslog tag one pattern "copy bootflash:.* running-config.*"
event syslog tag two pattern "copy run start"
event syslog tag three pattern "hello"
tag one or two or three happens 1 in 120
action 1.0 reload module 1
```

最大障害しきい値に達すると、AsicMemory、FpgaRegTest、および L2ACLRedirect システムポリシーによってスイッチのリロードが強制されます。次に、これらのポリシーのいずれかのデフォルト アクションを上書きし、代わりに syslog を発行する例を示します。

```
event manager applet gold override __fpgareg
action 1 syslog priority emergencies msg FpgaRegTest_override
```

次に、デフォルト ポリシーを上書きし、デフォルト アクションを実行する例を示します。

```
event manager applet gold_fpga_ovrd override __fpgareg
  action 1 policy-default
  action 2 syslog priority emergencies msg FpgaRegTest_override
```



(注) その他の設定例については、「[Embedded Event Manager システム イベントおよび設定例](#)」を参照してください。

イベント ログの自動収集とバックアップ

自動的に収集されたイベントログは、スイッチのメモリにローカルに保存されます。イベントログ ファイルストレージは、一定期間ファイルを保存する一時バッファです。時間が経過すると、バッファのロールオーバーによって次のファイルのためのスペースが確保されます。ロールオーバーでは、先入れ先出し方式が使用されます。

Cisco NX-OS リリース 9.3(3)以降、EEM は以下の収集およびバックアップ方法を使用します。

- 拡張ログ ファイルの保持
- トリガーベースのイベント ログの自動収集

拡張ログ ファイルの保持

Cisco NX-OS リリース 9.3 (3) 以降、すべての Cisco Nexus プラットフォーム スイッチは、少なくとも 8 GB のシステムメモリを備え、イベント ロギング ファイルの拡張保持をサポートします。ログ ファイルをスイッチにローカルに保存するか、外部コンテナを介してリモートに保存すると、ロールオーバーによるイベント ログの損失を削減できます。

すべてのサービスの拡張ログ ファイル保持のイネーブル化

拡張ログファイル保持は、スイッチで実行されているすべてのサービスに対してデフォルトで有効になっています。スイッチでログファイル保持機能がイネーブルになっていない場合 (**no bloggerd log-dump** が設定されている場合)、次の手順を使用してイネーブルにします。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します

すべてのサービスの拡張ログ ファイル保持の無効化

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 2	bloggerd log-dump all 例 : <pre>switch(config)# bloggerd log-dump all switch(config)#</pre>	すべてのサービスのログ ファイル保持機能をイネーブルにします。

例

```
switch# configure terminal
switch(config)# bloggerd log-dump all
Sending Enable Request to Bloggerd
Bloggerd Log Dump Successfully enabled
switch(config)#
```

すべてのサービスの拡張ログ ファイル保持の有効化

拡張ログファイル保持は、スイッチ上のすべてのサービスに対してデフォルトで有効になっています。スイッチのログファイル保持機能がすべてのサービスに対して有効になっている場合は、次の手順を実行します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します
ステップ 2	no bloggerd log-dump all 例 : <pre>switch(config)# no bloggerd log-dump all switch(config)#</pre>	スイッチ上のすべてのサービスのログ ファイル保持機能を無効にします。

例

```
switch# configure terminal
switch(config)# no bloggerd log-dump all
Sending Disable Request to Bloggerd
Bloggerd Log Dump Successfully disabled
switch(config)#
```

単一サービスの拡張ログファイル保持の有効化

拡張ログファイル保持は、スイッチで実行されているすべてのサービスに対してデフォルトで有効になっています。スイッチで (**no bloggerd log-dump**が設定されていて) ログ ファイル保

持機能が有効になっていない場合、次の手順を使用して単一のサービスに対して有効にします。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	show system internal sysmgr service name <i>service-type</i> 例 : <pre>switch# show system internal sysmgr service name aclmgr</pre>	サービス SAP 番号を含む ACL Manager に関する情報を表示します。
ステップ 2	configure terminal 例 : <pre>switch# configure terminal switch(config)#</pre>	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	bloggerd log-dump sap number 例 : <pre>switch(config)# bloggerd log-dump sap 351</pre>	ACL Manager サービスのログ ファイル 保持機能をイネーブルにします。
ステップ 4	show system internal bloggerd info log-dump-info 例 : <pre>switch(config)# show system internal bloggerd info log-dump-info</pre>	スイッチ上のログ ファイル保持機能に関する情報を表示します。

例

```
switch# show system internal sysmgr service name aclmgr
Service "aclmgr" ("aclmgr", 80):
  UUID = 0x182, PID = 653, SAP = 351
  State: SRV_STATE_HANDSHAKED (entered at time Mon Nov  4 11:10:41 2019).
  Restart count: 1
  Time of last restart: Mon Nov  4 11:10:39 2019.
  The service never crashed since the last reboot.
  Tag = N/A
  Plugin ID: 0
switch(config)# configure terminal
switch(config)# bloggerd log-dump sap 351
Sending Enable Request to Bloggerd
Bloggerd Log Dump Successfully enabled
switch(config)# show system internal bloggerd info log-dump-info
-----
Log Dump config is READY
Log Dump is DISABLED for ALL application services in the switch
Exceptions to the above rule (if any) are as follows:
-----
Module      | VDC      | SAP      | Enabled?
-----
```

```

1          | 1          | 351 (MTS_SAP_ACLMGR      ) | Enabled
-----
Log Dump Throttle Switch-Wide Config:
-----
Log Dump Throttle                               : ENABLED
Minimum buffer rollover count (before throttling) : 5
Maximum allowed rollover count per minute       : 1
-----

switch(config)#

```

拡張ログ ファイルの表示

スイッチに現在保存されているイベント ログ ファイルを表示するには、次の作業を実行します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	dir debug:log-dump/ 例： switch# dir debug:log-dump/	スイッチに現在保存されているイベント ログ ファイルを表示します。

例

```

switch# dir debug:log-dump/

3676160 Dec 05 02:43:01 2019 20191205023755_evtlog_archive.tar
3553280 Dec 05 06:05:06 2019 20191205060005_evtlog_archive.tar

Usage for debug://sup-local
913408 bytes used
4329472 bytes free
5242880 bytes total

```

単一サービスに対する拡張ログファイル保持の無効化

拡張ログファイル保持は、スイッチ上のすべてのサービスに対してデフォルトで有効になっています。スイッチで単一またはすべてのサービス（Cisco NX-OSリリース9.3(5)ではデフォルト）に対してログファイル保持機能が有効になっている場合に、特定のサービスを無効にするには、次の手順を実行します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	show system internal sysmgr service name <i>service-type</i> 例：	サービス SA P番号を含む ACL Manager に関する情報を表示します。

	コマンドまたはアクション	目的
	switch# show system internal sysmgr service name aclmgr	
ステップ 2	configure terminal 例： switch# configure terminal switch(config)#	グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。
ステップ 3	no bloggerd log-dump sap number 例： switch(config)# no bloggerd log-dump sap 351	ACL Manager サービスのログ ファイル 保持機能を無効にします。
ステップ 4	show system internal bloggerd info log-dump-info 例： switch(config)# show system internal bloggerd info log-dump-info	スイッチ上のログ ファイル保持機能に 関する情報を表示します。

例

次に、「aclmgr」という名前のサービスの拡張ログ ファイル保持を無効にする例を示 します。

```
switch# show system internal sysmgr service name aclmgr
Service "aclmgr" ("aclmgr", 80):
  UUID = 0x182, PID = 653, SAP = 351
  State: SRV_STATE_HANDSHAKED (entered at time Mon Nov  4 11:10:41 2019).
  Restart count: 1
  Time of last restart: Mon Nov  4 11:10:39 2019.
  The service never crashed since the last reboot.
  Tag = N/A
  Plugin ID: 0
switch(config)# configure terminal
switch(config)# no bloggerd log-dump sap 351
Sending Disable Request to Bloggerd
Bloggerd Log Dump Successfully disabled
switch(config)# show system internal bloggerd info log-dump-info
-----
Log Dump config is READY
Log Dump is DISABLED for ALL application services in the switch
Exceptions to the above rule (if any) are as follows:
-----
Module      | VDC      | SAP              | Enabled?
-----
1           | 1        | 351 (MTS_SAP_ACLMGR) | Disabled
-----
Log Dump Throttle Switch-Wide Config:
-----
Log Dump Throttle                : ENABLED
Minimum buffer rollover count (before throttling) : 5
Maximum allowed rollover count per minute         : 1
```

```
switch(config)#
```

トリガーベースのイベント ログの自動収集

トリガーベースのログ収集機能：

- 問題発生時に関連データを自動的に収集します。
- コントロールプレーンへの影響なし
- カスタマイズ可能な設定ですか：
 - シスコが入力するデフォルト
 - 収集対象は、ネットワーク管理者または Cisco TACによって、選択的に上書きされません。
 - イメージのアップグレード時は新しいトリガーを自動的に更新します。
- ログをスイッチにローカルに保存するか、外部サーバにリモートで保存します。
- 重大度 0、1、および 2 の syslog をサポートします：
- アドホック イベントのカスタム syslog (syslog と接続する自動収集コマンド)

トリガーベースのログ ファイルの自動収集の有効化

ログ ファイルのトリガーベースの自動作成を有効にするには、`__syslog_trigger_default` システム ポリシーのオーバーライドポリシーをカスタム YAML ファイルで作成し、情報を収集する特定のログを定義する必要があります。

ログ ファイルの自動収集を有効にするカスタム YAML ファイルの作成の詳細については、[自動収集 YAML ファイルの設定 \(31 ページ\)](#) を参照してください。

自動収集 YAML ファイル

EEM 機能の **action** コマンドで指定される自動収集 YAML ファイルは、さまざまなシステムまたは機能コンポーネントのアクションを定義します。このファイルは、スイッチ ディレクトリ `/bootflash/scripts` にあります。デフォルトの YAML ファイルに加えて、コンポーネント固有の YAML ファイルを作成し、同じディレクトリに配置できます。コンポーネント固有の YAML ファイルの命名規則は **component-name.yaml** です。コンポーネント固有のファイルが同じディレクトリに存在する場合は、**action** コマンドで指定されたファイルよりも優先されます。たとえば、アクションファイル **bootflash/scripts/platform.yaml** がデフォルトのアクションファイル `/bootflash/scripts` とともに **bootflash/scripts/test.yaml** ディレクトリにある場合、**platform.yaml** ファイルで定義された命令がデフォルトの **test.yaml** ファイルに存在するプラットフォーム コンポーネントの手順よりも優先します。

コンポーネントの例としては、ARP、BGP、IS-ISなどがあります。すべてのコンポーネント名に精通していない場合は、シスコカスタマーサポートに連絡して、コンポーネント固有のアクション（およびデフォルトの **test.yaml** ファイル）の YAML ファイルを定義してください。

例：

```
event manager applet test_1 override __syslog_trigger_default
  action 1.0 collect test.yaml $_syslog_msg
```

自動収集 YAML ファイルの設定

YAML ファイルの内容によって、トリガーベースの自動収集時に収集されるデータが決まります。スイッチには YAML ファイルが 1 つだけ存在しますが、任意の数のスイッチ コンポーネントとメッセージの自動収集メタデータを含めることができます。

スイッチの次のディレクトリで YAML ファイルを見つけます。

```
/bootflash/scripts
```

次の例を使用して、トリガーベース収集の YAML ファイルを呼び出します。この例は、ユーザ定義の YAML ファイルを使用してトリガーベース収集を実行するために最低限必要な設定を示しています。

```
switch# show running-config eem
!Command: show running-config eem
!Running configuration last done at: Mon Sep 30 19:34:54 2019
!Time: Mon Sep 30 22:24:55 2019
version 9.3(3) Bios:version 07.59
event manager applet test_1 override __syslog_trigger_default
  action 1.0 collect test.yaml $_syslog_msg
```

上記の例では、「test_1」がアプレットの名前で、「test.yaml」が /bootflash/scripts ディレクトリにあるユーザ設定の YAML ファイルの名前です。

YAML ファイルの例

次に、トリガーベースのイベント ログ自動収集機能をサポートする基本的な YAML ファイルの例を示します。ファイル内のキー/値の定義を次の表に示します。



- (注) YAML ファイルに適切なインデントがあることを確認します。ベストプラクティスとして、スイッチで使用する前に任意の「オンライン YAML 検証」を実行します。

```
bash-4.3$ cat /bootflash/scripts/test.yaml
version: 1
components:
  securityd:
    default:
      tech-sup: port
      commands: show module
  platform:
    default:
      tech-sup: port
      commands: show module
```

キー : 値	説明
バージョン : 1	1 に設定します。他の番号を使用すると、自動収集スクリプトに互換性がなくなります。
コンポーネント :	以下がスイッチ コンポーネントであることを指定するキーワード。
securityd :	syslog コンポーネントの名前 (securityd は syslog のファシリティ名)。
デフォルト :	コンポーネントに属するすべてのメッセージを識別します。
tech-sup : port	securityd syslog コンポーネントのポート モジュールのテクニカル サポートを収集します。
コマンド : show module	securityd syslog コンポーネントの show module コマンド出力を収集します。
プラットフォーム :	syslog コンポーネントの名前 (platform は syslog のファシリティ名)。
tech-sup : port	platform syslog コンポーネントのポート モジュールのテクニカル サポートを収集します。
コマンド : show module	platform syslog コンポーネントの show module コマンド出力を収集します。

特定のログにのみ自動収集メタデータを関連付けるには、次の例を使用します。たとえば、SECURITYD-2-FEATURE_ENABLE_DISABLE

```
securityd:
  feature_enable_disable:
    tech-sup: security
    commands: show module
```

キー : 値	説明
securityd :	syslog コンポーネントの名前 (securityd は syslog のファシリティ名)。
feature_enable_disable :	syslog メッセージのメッセージ ID。
tech-sup : security	securityd syslog コンポーネントのセキュリティモジュールのテクニカル サポートを収集します。
コマンド : show module	セキュリティ syslog コンポーネントの show module コマンド出力を収集します。

上記の YAML エントリの syslog 出力の例 :

```
2019 Dec 4 12:41:01 n9k-c93108tc-fx %SECURITYD-2-FEATURE_ENABLE_DISABLE: User
has enabled the feature bash-shell
```

複数の値を指定するには、次の例を使用します。

```
version: 1
components:
  securityd:
    default:
      commands: show module;show version;show module
      tech-sup: port;lldp
```



(注) 複数の `show` コマンドとテクニカルサポートキーの値を区切るには、セミコロンを使用します (前の例を参照)。

リリース 10.1(1) 以降では、`test.yaml` は複数の YAML ファイルが存在するフォルダに置き換えることができます。フォルダ内のすべての YAML ファイルは、`ComponentName.yaml` 命名規則に従う必要があります。

次の例では、`test.yaml` が `test_folder` に置き換えられます。

```
test.yaml:
event manager applet logging2 override __syslog_trigger_default
  action 1.0 collect test.yaml rate-limit 30 $_syslog_msg

test_folder:
event manager applet logging2 override __syslog_trigger_default
  action 1.0 collect test_folder rate-limit 30 $_syslog_msg
```

次の例は、`test_folder` のパスとコンポーネントを示しています。

```
ls /bootflash/scripts/test_folder
bgp.yaml ppm.yaml
```

コンポーネントあたりの自動収集の量の制限

自動収集の場合、コンポーネントイベントあたりのバンドル数の制限はデフォルトで3に設定されています。1つのコンポーネントで3つ以上のイベントが発生すると、イベントはドロップされ、ステータスメッセージ **EVENTLOGLIMITREACHED** が表示されます。イベントログがロールオーバーすると、コンポーネントイベントの自動収集が再開されます。

例：

```
switch# show system internal event-logs auto-collect history
DateTime          Snapshot ID  Syslog                               Status/Secs/Logsize(Bytes)
2020-Jun-27 07:20:03 1140276903 ACLMGR-0-TEST_SYSLOG                 EVENTLOGLIMITREACHED
2020-Jun-27 07:15:14 1026359228 ACLMGR-0-TEST_SYSLOG                 RATELIMITED
2020-Jun-27 07:15:09 384952880  ACLMGR-0-TEST_SYSLOG                 RATELIMITED
2020-Jun-27 07:13:55 1679333688 ACLMGR-0-TEST_SYSLOG                 PROCESSED:2:9332278
2020-Jun-27 07:13:52 1679333688 ACLMGR-0-TEST_SYSLOG                 PROCESSING
2020-Jun-27 07:12:55 502545693  ACLMGR-0-TEST_SYSLOG                 RATELIMITED
2020-Jun-27 07:12:25 1718497217 ACLMGR-0-TEST_SYSLOG                 RATELIMITED
2020-Jun-27 07:08:25 1432687513 ACLMGR-0-TEST_SYSLOG                 PROCESSED:2:10453823
2020-Jun-27 07:08:22 1432687513 ACLMGR-0-TEST_SYSLOG                 PROCESSING
2020-Jun-27 07:06:16 90042807  ACLMGR-0-TEST_SYSLOG                 RATELIMITED
2020-Jun-27 07:03:26 1737578642 ACLMGR-0-TEST_SYSLOG                 RATELIMITED
2020-Jun-27 07:02:56 40101277  ACLMGR-0-TEST_SYSLOG                 PROCESSED:3:10542045
2020-Jun-27 07:02:52 40101277  ACLMGR-0-TEST_SYSLOG                 PROCESSING
```

自動収集ログ ファイル

自動収集ログ ファイルについて

YAML ファイルの設定によって、自動収集ログ ファイルの内容が決まります。収集ログ ファイルで使用されるメモリの量は設定できません。保存後のファイルが消去される頻度は設定できます。

自動収集ログ ファイルは、次のディレクトリに保存されます。

```
switch# dir bootflash:eem_snapshots
44205843 Sep 25 11:08:04 2019
1480625546_SECURITYD_2_FEATURE_ENABLE_DISABLE_eem_snapshot.tar.gz
Usage for bootflash://sup-local
6940545024 bytes used
44829761536 bytes free
51770306560 bytes total
```

ログ ファイルへのアクセス

コマンドキーワード「debug」を使用してログを検索します。

```
switch# dir debug:///
...
26 Oct 22 10:46:31 2019 log-dump
24 Oct 22 10:46:31 2019 log-snapshot-auto
26 Oct 22 10:46:31 2019 log-snapshot-user
```

次の表に、ログの場所と保存されるログの種類を示します。

場所	説明
log-dump	このフォルダには、ログロールオーバー時にイベントログが保存されます。
log-snapshot-auto	このフォルダには、syslog イベント0、1、2の自動収集ログが含まれます。
log-snapshot-user	このフォルダには、bloggerd log-snapshot の実行時に収集されたログが保存されます。

ログ ロールオーバーで生成されたログ ファイルを表示するには、次の例を参考にしてください。

```
switch# dir debug:log-dump/
debug:log-dump/20191022104656_evtlog_archive.tar
debug:log-dump/20191022111241_evtlog_archive.tar
debug:log-dump/20191022111841_evtlog_archive.tar
debug:log-dump/20191022112431_evtlog_archive.tar
debug:log-dump/20191022113042_evtlog_archive.tar
debug:log-dump/20191022113603_evtlog_archive.tar
```

ログ tar ファイルの解析

tar ファイル内のログを解析するには、次の例を参考にしてください。

```
switch# show system internal event-logs parse
debug:log-dump/20191022104656_evtlog_archive.tar
-----LOGS:/tmp/BLOGGERD0.991453012199/tmp/1-191022104658-191022110741-device_test-M27-V1-I1:0-P884.gz-----
2019 Oct 22 11:07:41.597864 E_DEBUG Oct 22 11:07:41 2019(diag_test_start):Data Space
```

```

Limits(bytes): Soft: -1  Hard: -1
2019 Oct 22 11:07:41.597857 E_DEBUG Oct 22 11:07:41 2019(diag_test_start):Stack Space
Limits(bytes): Soft: 500000  Hard: 500000
2019 Oct 22 11:07:41.597850 E_DEBUG Oct 22 11:07:41 2019(diag_test_start):AS: 1005952076
-1
2019 Oct 22 11:07:41.597406 E_DEBUG Oct 22 11:07:41 2019(device_test_process_events):Sdwrap
msg unknown
2019 Oct 22 11:07:41.597398 E_DEBUG Oct 22 11:07:41 2019(diag_test_start):Going back to
select
2019 Oct 22 11:07:41.597395 E_DEBUG Oct 22 11:07:41 2019(nvram_test):TestNvram examine
27 blocks
2019 Oct 22 11:07:41.597371 E_DEBUG Oct 22 11:07:41 2019(diag_test_start):Parent: Thread
created test index:4 thread_id:-707265728
2019 Oct 22 11:07:41.597333 E_DEBUG Oct 22 11:07:41 2019(diag_test_start):Node inserted
2019 Oct 22 11:07:41.597328 E_DEBUG Oct 22 11:07:41 2019(diag_test_start):The test index
in diag is 4
2019 Oct 22 11:07:41.597322 E_DEBUG Oct 22 11:07:41 2019(diag_test_start):result severity
level
2019 Oct 22 11:07:41.597316 E_DEBUG Oct 22 11:07:41 2019(diag_test_start):callhome alert
level

```

次の表に、特定の tar ファイルの解析に使用できる追加のキーワードを示します。

キーワード	説明
component	プロセス名で識別されるコンポーネントに属するログをデコードします。
from-datetime	yy [mm [dd [HH [MM [SS]]]]] 形式で指定した、特定の日時のログをデコードします。
instance	デコードする SDWRAP バッファ インスタンスのリスト (カンマ区切り)。
module	SUPやLCなどのモジュールからのログをデコードします (モジュールIDを使用)。
to-datetime	yy [mm [dd [HH [MM [SS]]]]] 形式で指定した、特定の日時までのログをデコードします。

別の場所へログをコピーする

リモートサーバなどの別の場所にログをコピーするには、次の例を参考にしてください。

```

switch# copy debug:log-dump/20191022104656_evtlog_archive.tar
scp://<ip-address>/nobackup/<user> vrf management use-kstack
Enter username: user@<ip-address>'s password:
20191022104656_evtlog_archive.tar                               100% 130KB
 130.0KB/s   00:00
Copy complete, now saving to disk (please wait)...
Copy complete.

```

自動収集ログファイルの消去

生成されるトリガーベースの自動収集ログには、EventHistory と EventBundle の 2 種類があります。

EventHistory ログの消去ロジック

イベント履歴の場合は、`/var/sysmgr/srv_logs/xport` フォルダで消去が行われます。250 MB のパーティション RAM が、`/var/sysmgr/srv_logs` ディレクトリにマウントされます。

`/var/sysmgr/srv_logs` のメモリ使用率が、割り当てられた 250 MB の 65% 未満の場合、ファイルは消去されません。メモリ使用率が 65% の制限レベルに達すると、新しいログの保存を続行するのに十分なメモリが使用可能になるまで、最も古いファイルから消去されます。

EventBundle ログの消去ロジック

イベントバンドルの場合、消去ロジックは `/bootflash/eem_snapshots` フォルダでの状態に基づいて実行されます。自動収集されたスナップショットを保存するために、EEM 自動収集スクリプトは、ブートフラッシュストレージの 5% を割り当てます。ブートフラッシュ容量の 5% が使用されると、ログは消去されます。

新しい自動収集ログが利用可能になっているものの、ブートフラッシュに保存するスペースがない場合（すでに 5% の容量に達している）、システムは次のことを確認します。

1. 12 時間以上経過した既存の自動収集ファイルがある場合、システムはファイルを削除し、新しいログをコピーします。
2. 既存の自動収集ファイルが 12 時間未満の場合、新しく収集されたログは保存されずに廃棄されます。

デフォルトページ時間である 12 時間は、次のコマンドを使用して変更できます。コマンドで指定する時間は分単位です。

```
switch(config)# event manager applet test override __syslog_trigger_default
switch(config-applet)# action 1.0 collect test.yaml purge-time 300 $_syslog_msg
```

event manager command: `test` は、ポリシー例の名前です。`__syslog_trigger_default` は、オーバーライドする必要があるシステムポリシーの名前です。この名前は、二重アンダースコア (`__`) で始まる必要があります。

action command: `1.0` は、アクションの実行順番を示している例となっています。`collect` は、データが YAMU ファイルを使用して収集されることを示しています。`test.yaml` は、YAML ファイルの名前の例です。`$_syslog_msg` は、コンポーネントの名前です。



- (注) どの時点でも、進行中のトリガーベースの自動収集イベントは 1 つだけです。自動収集がすでに発生しているときに別の新しいログ イベントを保存しようとするすると、新しいログ イベントは破棄されます。

デフォルトでは、トリガーベースのバンドルは 5 分 (300 秒) ごとに 1 つだけ収集されます。このレート制限は、次のコマンドでも設定できます。コマンドで指定する時間は秒単位です。

```
switch(config)# event manager applet test override __syslog_trigger_default
switch(config-applet)# action 1.0 collect test.yaml rate-limit 600 $_syslog_msg
```

event manager command: `test` はポリシーの名前の例です。`__syslog_trigger_default` は、オーバーライドするシステムポリシーの名前の例です。この名前は、二重アンダースコア (`__`) で始まる必要があります。

action command: 1.0 は、アクションの実行順番を示している例となっています。**collect** は、データが YAMU ファイルを使用して収集されることを示しています。*test.yaml* は、YAML ファイルの名前の例です。**\$_syslog_msg** は、コンポーネントの名前です。

リリース 10.1(1) 以降では、トリガーの最大数オプションを使用して収集レートを調整することもできます。これは、この数のトリガーだけを保つものです。**max-triggers** の値に達すると、**syslog** が発生しても、これ以上バンドルは収集されなくなります。

```
event manager applet test_1 override __syslog_trigger_default
  action 1.0 collect test.yaml rate-limit 30 max-triggers 5 $_syslog_msg
```



- (注) 自動収集されたバンドルを `debug:log-snapshot-auto/` により手動で削除すれば、次のイベントが発生したとき、**max-triggers** の設定数に基づいて収集が再開されます。

自動収集の統計情報と履歴

トリガーベースの収集統計情報の例を次に示します。

```
switch# show system internal event-logs auto-collect statistics
-----EEM Auto Collection Statistics-----
Syslog Parse Successful :88 Syslog Parse Failure :0
Syslog Ratelimited :0 Rate Limit Check Failed :0
Syslog Dropped(Last Action In Prog) :53 Storage Limit Reached :0
User Yaml Action File Unavailable :0 User Yaml Parse Successful :35
User Yaml Parse Error :0 Sys Yaml Action File Unavailable :11
Sys Yaml Parse Successful :3 Sys Yaml Parse Error :0
Yaml Action Not Defined :0 Syslog Processing Initiated :24
Log Collection Failed :0 Tar Creation Error :0
Signal Interrupt :0 Script Exception :0
Syslog Processed Successfully :24 Logfiles Purged :0
```

次の例は、CLI コマンドを使用して取得されたトリガーベースの収集履歴（処理された syslog 数、処理時間、収集されたデータのサイズ）を示しています。

```
switch# show system internal event-logs auto-collect history
DateTime Snapshot ID Syslog Status/Secs/Logsize(Bytes)
2019-Dec-04 05:30:32 1310232084 VPC-0-TEST_SYSLOG PROCESSED:9:22312929
2019-Dec-04 05:30:22 1310232084 VPC-0-TEST_SYSLOG PROCESSING
2019-Dec-04 04:30:13 1618762270 ACLMGR-0-TEST_SYSLOG PROCESSED:173:33194665
2019-Dec-04 04:28:47 897805674 SYSLOG-1-SYSTEM_MSG DROPPED-LASTACTIONINPROG
2019-Dec-04 04:28:47 947981421 SYSLOG-1-SYSTEM_MSG DROPPED-LASTACTIONINPROG
2019-Dec-04 04:27:19 1618762270 ACLMGR-0-TEST_SYSLOG PROCESSING
2019-Dec-04 02:17:16 1957148102 CARDCLIENT-2-FPGA_BOOT_GOLDEN NOYAMLFILEFOUND
```

トリガーベースのログ収集の確認

次の例のように **show event manager system-policy | i trigger** コマンドを入力して、トリガーベースのログ収集機能が有効になっていることを確認します。

```
switch# show event manager system-policy | i trigger n 2
  Name : __syslog_trigger_default
  Description : Default policy for trigger based logging
  Overridable : Yes
  Event type : 0x2101
```

トリガーベースのログ ファイル生成の確認

トリガーベースの自動収集機能によってイベント ログ ファイルが生成されたかどうかを確認できます。次の例のいずれかのコマンドを入力します。

```
switch# dir bootflash:eem_snapshots
9162547 Nov 12 22:33:15 2019
1006309316_SECURITYD_2_FEATURE_ENABLE_DISABLE_eem_snapshot.tar.gz

Usage for bootflash://sup-local
8911929344 bytes used
3555950592 bytes free
12467879936 bytes total

switch# dir debug:log-snapshot-auto/
63435992 Dec 03 06:28:52 2019
20191203062841_1394408030_PLATFORM_2_MOD_PWRDN_eem_snapshot.tar.gz

Usage for debug://sup-local
544768 bytes used
4698112 bytes free
5242880 bytes total
```

ローカル ログ ファイルのストレージ

ローカル ログ ファイルのストレージ機能：

- ローカルデータストレージ時間の量は、導入の規模とタイプによって異なります。モジュラスイッチと非モジュラスイッチの両方で、ストレージ時間は15分から数時間のデータです。長期間にわたる関連ログを収集するには、次の手順を実行します。
 - 必要な特定のサービス/機能に対してのみイベント ログの保持を有効にします。「[単一サービスの拡張ログファイル保持の有効化 \(26 ページ\)](#)」を参照してください。
 - スイッチから内部イベント ログをエクスポートします。「[外部ログ ファイルのストレージ \(41 ページ\)](#)」を参照してください。
- 圧縮されたログは RAM に保存されます。
- 250MB のメモリは、ログ ファイル ストレージ用に予約されています。
- ログ ファイルは tar 形式で最適化されます (5 分ごとに 1 ファイルまたは 10 MB のいずれか早い方)。
- スナップショット収集を許可します。

最近のログ ファイルのローカル コピーの生成

拡張ログファイル保持は、スイッチで実行されているすべてのサービスに対してデフォルトで有効になっています。ログ ファイルは、フラッシュ メモリにローカルに保存されます。次の手順を使用して、最新のイベント ログ ファイルを最大 10 個生成します。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	<p>bloggerd log-snapshot [<i>file-name</i>] [bootflash: <i>file-path</i> logflash: <i>file-path</i> usb1:] [size <i>file-size</i>] [time <i>minutes</i>]</p> <p>例 :</p> <pre>switch# bloggerd log-snapshot snapshot1</pre>	<p>スイッチに保存されている最新の 10 個のイベント ログのスナップショットバンドルファイルを作成します。この操作のデフォルトのストレージは logflash です。</p> <p><i>file-name</i> : 生成されたスナップショットログ ファイルバンドルのファイル名。 <i>file-name</i> には最大 64 文字を使用します。</p> <p>(注) この変数はオプションです。設定されていない場合、システムはタイムスタンプと「_snapshot_bundle.tar」をファイル名として適用します。</p> <p>例 :</p> <pre>20200605161704_snapshot_bundle.tar</pre> <p>bootflash: <i>file-path</i> : スナップショットログ ファイルバンドルがブートフラッシュに保存されているファイルパス。次の初期パスのいずれかを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • bootflash:/// • bootflash://module-1/ • bootflash://sup-1/ • bootflash://sup-active/ • bootflash://sup-local/ <p>logflash: <i>file-path</i> : スナップショットログ ファイルバンドルがログフラッシュに保存されるファイルパス。次の初期パスのいずれかを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • logflash:/// • logflash://module-1/ • logflash://sup-1/ • logflash://sup-active/ • logflash://sup-local/

	コマンドまたはアクション	目的
		<p>usb1: : USB デバイス上のスナップショットログファイルバンドルが保存されているファイルパス。</p> <p>size file-size : メガバイト (MB) 単位のサイズに基づくスナップショットログファイルバンドル。範囲は 5MB〜250MB です。</p> <p>time minutes : 最後の x 時間 (分) に基づくスナップショットログファイルバンドル。範囲は 1〜30 分です。</p>

例

```
switch# bloggerd log-snapshot snapshot1
Snapshot generated at logflash:evt_log_snapshot/snapshot1_snapshot_bundle.tar Please
cleanup once done.
switch#
switch# dir logflash:evt_log_snapshot
159098880 Dec 05 06:40:24 2019 snapshot1_snapshot_bundle.tar
159354880 Dec 05 06:40:40 2019 snapshot2_snapshot_bundle.tar

Usage for logflash://sup-local
759865344 bytes used
5697142784 bytes free
6457008128 bytes total
```

次の例のコマンドを使用して、同じファイルを表示します。

```
switch# dir debug:log-snapshot-user/
159098880 Dec 05 06:40:24 2019 snapshot1_snapshot_bundle.tar
159354880 Dec 05 06:40:40 2019 snapshot2_snapshot_bundle.tar

Usage for debug://sup-local
929792 bytes used
4313088 bytes free
5242880 bytes total
```



(注) 例の最後のファイル名に注意してください。個々のログファイルは、生成された日時によっても識別されます。

リリース 10.1(1) 以降、LC コアファイルには log-snapshot バンドルが含まれていません。log-snapshot バンドルファイル名は、tac_snapshot_bundle.tar.gz です。次に例を示します。

```
bash-4.2$ tar -tvf 1610003655_0x102_aclqos_log.17194.tar.gz
drwxrwxrwx root/root 0 2021-01-07 12:44 pss/
-rw-rw-rw- root/root 107 2021-01-07 12:44 pss/dev_shm_aclqos_runtime_info_lc.gz
-rw-rw-rw- root/root 107 2021-01-07 12:44 pss/dev_shm_aclqos_runtime_cfg_lc.gz
-rw-rw-rw- root/root 107 2021-01-07 12:44 pss/dev_shm_aclqos_debug.gz
```

```

-rw-rw-rw- root/root 129583 2021-01-07 12:44 pss/clqosdb_ver1_0_user.gz
-rw-rw-rw- root/root 20291 2021-01-07 12:44 pss/clqosdb_ver1_0_node.gz
-rw-rw-rw- root/root 444 2021-01-07 12:44 pss/clqosdb_ver1_0_ctrl.gz
drwxrwxrwx root/root 0 2021-01-07 12:44 proc/
-rw-rw-rw- root/root 15159 2021-01-07 12:44 0x102_aclqos_compress.17194.log.25162
-rw-rw-rw- root/root 9172392 2021-01-07 12:43 0x102_aclqos_core.17194.gz
-rw-rw-rw- root/root 43878 2021-01-07 12:44 0x102_aclqos_df_dmesg.17194.log.gz
-rw-rw-rw- root/root 93 2021-01-07 12:44 0x102_aclqos_log.17194
-rw-rw-rw- root/root 158 2021-01-07 12:44 0x102_aclqos_mcore.17194.log.gz
drwxrwxrwx root/root 0 2021-01-07 12:44 usd17194/
-rw-rw-rw- root/root 11374171 2021-01-07 12:44 tac_snapshot_bundle.tar.gz

```

外部ログ ファイルのストレージ

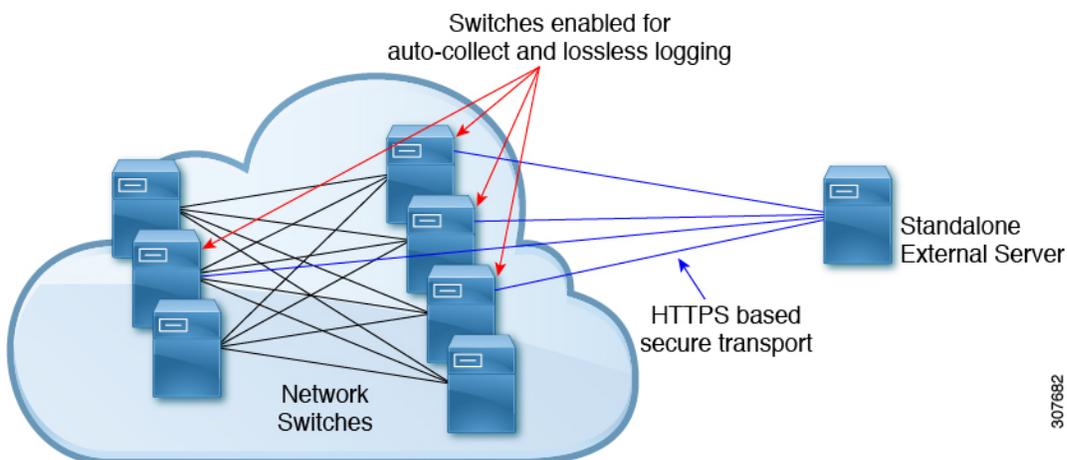
外部サーバソリューションは、ログを安全な方法でオフスイッチに保存する機能を提供します。



(注) 外部ストレージ機能を作成するため、Cisco Technical Assistance Center (TAC) に連絡して、外部サーバソリューションの展開をサポートを求めてください。

次に、外部ログ ファイルの保存機能を示します。

- オンデマンドで有効
- HTTPS ベースの転送
- ストレージ要件 :
 - 非モジュラ スイッチ : 300 MB
 - モジュラ スイッチ : 12 GB (1 日あたり、スイッチあたり)
- 通常、外部サーバには 10 台のスイッチのログが保存されます。ただし、外部サーバでサポートされるスイッチの数に厳密な制限はありません。



307682

外部サーバソリューションには、次の特性があります。

- コントローラレス環境
- セキュリティ証明書の手動管理
- サポートされている 3 つの使用例：
 - 選択したスイッチからのログの継続的な収集
 - TAC のサポートによる、シスコサーバへのログの展開とアップロード。
 - 限定的なオンプレミス処理



(注) 外部サーバでのログファイルの設定と収集については、Cisco TAC にお問い合わせください。
